

1. はじめに

本発表では、表示一般が孕む諸問題を検討する。まず、言語学者が当然のように使用しているグロスが、そもそもどういう役割を果たしているのかを検討する(2節)。次に、グロス・ラベル・図が共通に持つ機能を指摘しつつ、後二者に独自の問題——表示のための道具がその元々の機能を失っているという問題——を指摘する(3節・4節)。これらの問題が生じる理由を比喻の観点から考察したあと(5節)、問題への可能な対処法を検討する(6節)。

2. グロス

グロスが必要とされるのは、想定される読者が分析対象となる言語の知識を欠いている場合である。このことは例えば、日本語で書かれる論文において、日本語や英語の例文にはグロスを付すことが求められていないという慣例からも理解できる。日本語論文の読者は、日本語や英語の例文が理解できると想定されており、そのためグロスは不要だとされているのだろう。ここから、グロスの役割はあくまで理解のための助けであり、分析において本質的な役割を担う要素ではないと見なされていることが分かる^{1,2}。

それでは、グロスはどのように読者の理解を助けるのだろうか。ここで想定される読者は分析対象となる言語の知識を(僅かにしか)有していないため、例文の理解に際して一行目に示される対象言語は(ほとんど)役に立たない。理解に貢献するのはグロスおよび訳文だということになる。その過程はたとえば次の①～⑤のようなものである³。① [訳文を理解する] 記述に用いるメタ言語は読者にとっても馴染みのあるものであるため、直感的な理解が容易であり、手がかりとしての重要度が最も高い部分だと考えられる。→② [それぞれのグロスの意味を①を手がかりとして理解する] →③ [②によって得られた意味を足し合わせて全体の意味を想像する] 一定の言語学の訓練を受けた読者であれば、各形態素に付されたグロスから、要素同士の関係を推測し、全体としてどのような意味になるか見当をつけることができるだろう。④ [訳文と③の結果を比較して差分を算出する] →⑤ [④で得られた差分を用いて各要素のその文における働きを理解する]。

この過程は、日常的に言語を用いる場合と同様のものである(野矢 2010)。そのため、読者は容易にグロスによる表示を理解することができる。コミュニケーションにおいて話し手は、聞き手の知識状態を変更することを意図して言語を用いる。聞き手は話し手のそのような意図を読み取り、(話し手が能力・誠実さの点で信頼に足ると判断した場合には)話し手の意図したとおりに知識状態を変化させる。ここでは、話し手の意図が訳文に対応し、使用される個々の言語記号の意味がグロスに対応しているのである。さらに、あまり注目されていないが、*The Leipzig Glossing Rules* でも明言されているとおり、グロ

¹ 仮にグロスが本質的な役割を担う要素であるとされているのなら、対象言語が読者に理解できるものであったとしても、やはりグロスを付すことが求められているはずである。

² 日本語で書かれた論文の読者は主に日本語話者であり、その部分は英語については限定的な知識しか持たない。それにもかかわらず、英語の例文についても(日本語と同様に)グロスは不要だとされていることは、その役割があくまでも補助的なものであり、その貢献は最大に見積もっても学習者の言語知識を超えるものではないことを示唆する。

³ この①～⑤は、あくまで理解の様式であり、理解が生じる際にはこのすべての過程が関わっているとも、他の過程が関わっていないとも、あるいは必ずこの順序であるとも主張されていないことに注意されたい。

スには分析者自身の見解を示すという役割もある。つまり、読者への補助であると同時に、それ自体が（あくまで予備的なものとはいえ）言語分析にもなっているのである。このような、読者への助けであると同時に、分析の提示でもある2つの側面は、グロス以外の様々な表示にも見られるものである。以下では、ラベルと図を取り上げ、それぞれに固有の問題が潜んでいることを明らかにする。

3. ラベル

ラベルは、意味ではなく語もしくは形式を表す道具立てとされる。

引用 1

この本で [日本] 手話単語の例を出す際には / / が使われています。これはラベルと呼ばれます。ラベルは「訳」ではありません […] (松岡 2015: 14)

引用 2

[日本] 手話文のイラストのすぐ下には、[日本] 手話単語に対応して日本語単語が書いてありますが、これはその [日本] 手話単語の「意味」を表したのではなく、[日本] 手話単語に仮につけた名前 (ラベル) です。 (木村・市田 2014)

/ / 内に示される要素は日本語などによる訳ではないとされるが、一方でどのような表現を使用しても良いというわけではなく、「高度に動機づけられた」(Johnston 2008) もでなければならぬとされている。例えば、第一発表でも触れた (1) の /昨日/ を /キリン/ と、(2) の /黒田/ を /おはようございます/ と表記してはならないということだ。

(1) /昨日 田中 来る/

「昨日、田中が来た」 (松岡 2019: 353)

(2) /私 名前 黒田 いう/

「私の名前は黒田です」 (高嶋ほか 2018: 225)

この表記上のルールが問題を生んでいる。すなわち、本来は意味を表示するものではなかったはずのラベルが、その実践においては事実上意味を表すようになってきているという問題である (松田 2022)。

松岡 (2015: 66) は、図 1 と図 2 に対して同じ /食べる/ というラベルを貼っている。松岡 (2015) はもともと引用 1 でラベルは語を表示する道具であるとの立場に立つことを宣言しており、かつラベルは語と一対一に対応する (cf. 第一発表) ことを考えると、このラベル貼付法を見た読者は図 1 と図 2 を同じ語として理解することになる。しかし、両者はそもそも形式が異なるのだから普通同じ語とは見なされないだろう⁴。したがって、松



/食べる/

図 1



/食べる/

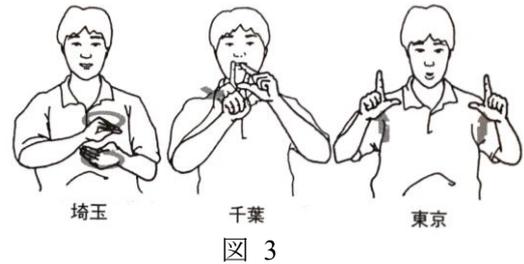
図 2

岡 (2015) の記述を整合的に解釈するためには、ここにおけるラベルには形式に関する情報を含まない——ラベルは意味のみを表す——と考えなければならない。つまり、松岡 (2015) は同じ本の中で、ラベルは意味を表示する道具であるとの立場にも立っている、言い換えればラベルをグロスとして使用し

⁴ 図 1 と図 2 の形式に共通部分があるとして、それに対して同じ /食べる/ というラベルを与えている可能性もあるが、松岡 (2015: 76) にある /寝る 1/ と /寝る 2/ の例を踏まえると、そのようにみなしているとは考えづらい (松田 2022)。

てもいと解釈できるわけである。

同様の問題は木村・市田 (2014) にも見られる (e.g. 図 3)。木村・市田 (2014) は日本手話の入門書であり、この本の想定読者は日本手話の知識を持たない人である (木村・市田 2014: 3)。もし木村・市田 (2014) が引用 2 で示した自身の規定を遵守しているとなると、彼らは意味を記載していない単語帳を初学者に販売しているということになるが、そのような不合理な本を彼らが作成するはずがない。つまり、ここにおけるラベルは意味を表していると考えざるを得ないのである。



ここで指摘した問題は、多くの日本手話研究に当てはまるものである。これは、音声言語の例文が「例文体・グロス・訳文」の 3 点セットで記述されるのに対して、日本手話の例文 (e.g. (1)(2)) が「例文体を表示するラベル・訳文」の 2 点セットでしか記述されないことから推察される。研究者は形式表記の役割とグロスの役割をラベルに対して (無意識に) 担わせてしまっているのである。

なぜラベルを、意味を表す道具として誤って使用してしまうのだろうか。これにはストロープ効果 (Stroop 1935) を引き起こすと同様の心的過程が関与していると思われる。文字列が表す色名とその文字列のインクの色が一致していないときに、人間であれば誰もがインクの色を答えるのにまごついてしまう。例えば、「くろ」と「あか」という文字列は、どちらも黒色で表示されている。前者では語としての「くろ」が表す色と、その語を表すインクの色が同一であるために、色名を簡単に答えられるが、後者では語としての「あか」が表す色と、その語を表すインクの色が食い違っているために、後者の方がインクの色を答えるのに時間がかかるということである。この現象は、単にインクの色を言えば良いと頭では分かっていつつも、文字列が表す語の意味をどうしても連想してしまうことから生じる。これと同種のことがラベルにおいても起こっていると考えられる。日本手話研究者のほとんどは日本語を母語とする。そのため、ラベルは意味ではなく語を表示するものであると頭では分かっていつつも、/ / の中にある日本語の意味をどうしても連想してしまい、その結果ラベルが意味表示の道具立てになってしまうということである。

4. 図

図は本文の説明をわかりやすくするための道具立てである。したがって、極論を言えば、本文で十分な説明が行われているのであれば図は不要である。ところが、本来このような補助道具に過ぎないはずの図が理論的主張として捉えられ、そこに見出された「不備」に対して批判がなされることが多い。本節では、その事例として Langacker のネットワークモデル (の図) に対する批判を取り上げる。

ネットワークモデルの概略図を英語の *run* の意味を例にして図 4 に示す (Langacker 1990: 267 の一部)。破線矢印は類似関係に基づく拡張 (extension) を、実線矢印は包含関係に基づく事例化 (instantiation) を表す。人間の走り方 (RAPID 2-LEGGED LOCOMOTION) と犬の走り方 (RAPID 4-LEGGED LOCOMOTION) には相違点があるが、共通点もある (RAPID n-LEGGED LOCOMOTION)。

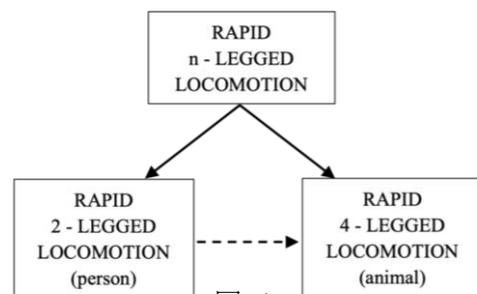


図 4

この意味的な共通点 (スキーマ) によって、RAPID 2-LEGGED LOCOMOTION から RAPID 4-LEGGED

LOCOMOTION への拡張が生じている。これは、RAPID 2-LEGGED LOCOMOTION と RAPID 4-LEGGED LOCOMOTION がともに、RAPID n-LEGGED LOCOMOTION を事例化しているということでもある。

ネットワークモデルに対する批判として、次の 2 つが挙げられる。①図には類似関係と包含関係が表現されているため、類似性に基づくメタファーや包含関係に基づくシネクドキは扱えるが、近接関係（フレーム）は描かれていないので、ネットワークモデルでは近接関係に基づくメトニミーは扱えない。②図ではスキーマが事例から独立したものとして描かれているが、その

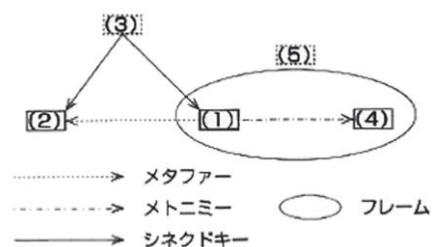


図 5

ような形での実在性は疑わしく、ネットワークモデルには不備がある。①の批判を行なっている論考としては、靱山 (2021) がある。靱山は理論の改定としてネットワークにフレームを描き込み、「統合モデル」を提案する (靱山 2021: 239; 図 5)。しかしこれは、理論の不備を修正したというよりも、図の不備を修正したに過ぎない (田中 2021)。というのも、Langacker が「語の意味は、ある事物と結びついた無限とも言える様々な知識へとアクセスする固有の方法によって規定される」(Langacker 2008: 39) と述べているからだ。この「無限とも言える様々な知識」の中にフレームが含まれていないはずはなく、図 4 図のそれぞれの節点は当然フレームを含む形で成立していると見るべきだろう。図 4 と図 5 は見た目において異なっているに過ぎないのである。

②の批判を根拠に、ネットワークモデルの代替案として「事例基盤モデル (exemplar model)」を提出する論者も存在する (e.g. Eddington (2007), Langacker (2016: 16; 図 6)。事例基盤モデルは、言語知識は事例の集積からなり、そこにはスキーマは存在しないと考える。事例間の類似関係は、スキーマを介することなく、各事例の空間における近さというかたちで直接表示される。しかし、これも①で指摘したことと同様に、代替モデルを提出したというよりも、図の描き方を修正したに過ぎない。というのも、類似関係が結ばれるときには原理上なんらかの共通性が見出されてお

Exemplar Model

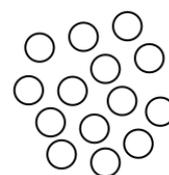


図 6

り、認知文法におけるスキーマはその共通性が知識の単位となったものであり、それぞれの事例と独立に存在する知識ではないからである (Langacker 2016)。(潜在的な) スキーマなしに、類似性を把握するというのは不可能である(「タピオカ」と「カエルの卵」には共通点(すなわち、潜在的なスキーマ)は存在しないがこの 2 つは類似している、というのは意味不明だろう)。つまり、事例基盤モデルであっても、事例間の類似性判定というしかたでスキーマは存在しているのであり、このモデルとネットワークモデルとの違いは、スキーマが図示されているか否かという点でしかないのである。

上記のような「批判」が生じるのはなぜなのだろうか。その原因の一端は、画像優位性効果にあると思われる。画像優位性効果とは、人間は一般に、文章よりも画像の方が理解・記憶しやすいという効果のことである (池谷 2013)。Langacker (2008) は「語の意味は、ある事物と結びついた無限とも言える様々な知識へとアクセスする固有の方法によって規定される」「類似性に基づいて拡張が起こる」と文章によって明確に記述しているにもかかわらず、図の方そのものを直接に「理解」し、それを Langacker 自身の主張として理解してしまったために、本来主張されていないことに対する「批判」を行うことになってしまったのだろう。繰り返しになるが、図は説明のための補助に過ぎない。仮に図の外形に問題があったとしても、それが即座に理論それ自体の欠陥には結びつかないのである。

5. メタファーの観点から問題を整理する

3 節および 4 節で検討した問題は一見すると独立したものに思われるが、比喩の観点から統一的に診断を与えることができる。すなわち、これらの問題はメタファーを真に受けることから生じたものである。たとえば、「メアリーは太陽だ」という発話の通常の解釈は、「メアリーは周囲まで快活な人間になってしまうほど、快活な性格をしている」という程度のものであろう。これを、太陽が有する属性はすべてメアリーにも当てはまると解釈するわけにはいかない。この発話を解釈する人は、メアリーが実際に太陽であるわけではないと知りながら、ある点では太陽と見なすこともできるということを正しく理解している必要がある。つまり、太陽が有する属性にはメアリーに当てはまるものと、そうでないものがあるのである（たとえば、この発話を、太陽が有する地球の 100 倍以上の大きさであるという属性をメアリーに帰す発話であると理解することには（通常）大きな問題がある）。

図にまつわる上述の問題には、2 つのメタファーが関わっている。1 つは言語知識をネットワークとして捉えるという第一レベルのメタファーである。もう 1 つはその第一レベルのメタファーを節点と線で表記するという第二レベルのメタファーである。4 節で見た「批判」は、ここにおける第二レベルのメタファーを真に受けることから生じている。すなわち、①の批判は、第二レベルのメタファーにおいてフレームが描かれていないということから、第一レベルのメタファーにおいてもそれが考慮されていないと結論付けてしまったことになされたものである。同様に、②の批判は、第二レベルのメタファーにおいてスキーマが描かれているということから、第一レベルのメタファーにおいても実在性に疑いのあるものの存在が想定されていると考え、その想定は誤りであると結論付けてしまったことでなされた批判である。さらに言えば、批判者自身が第一レベルのメタファーにおいてスキーマ（に相当する知識）を用いているにもかかわらず、第二レベルのメタファーにおいてその表示が存在しないために、第一レベルのメタファーにおいてもスキーマが存在しないかのように錯覚してしまっているのである (Langacker 2016)。

ラベルの場合にも 2 種類のメタファーが関わっている。1 つは、一連の身体動作を分割し、それを語というブロックの連鎖として捉える第一レベルのメタファーである。もう 1 つは、その第一レベルのメタファーを / / の中に日本語などの記述に用いる言語を入れたもの（すなわち、ラベル）によって表記するという第二レベルのメタファーである。この第二レベルのメタファーは、メアリーを太陽に喩えるように、日本手話の語を日本語の語に喩えるメタファーである。このメタファーを真に受けた日本手話研究者は、メアリーを太陽そのものと思ってしまうように、日本手話の語を日本語だと思ってしまうのである。それゆえ、語表示をするはずのラベルが気付けば意味表示の道具になってしまったということである。

メタファーとは、未知の対象をそれと類似した、既知の対象になぞらえて理解するための方略である (Lakoff and Johnson 1980)⁵。話し手が「メアリーは太陽だ」と言って自分の恋人を紹介したとき、聞き手は会ったことのないメアリーのありようを太陽になぞらえて理解することになるわけである。未知のものを既知のものになぞらえることで理解は容易になるが、その際には、先程指摘したように未知のものが有していない属性が既知のものから持ち込まれてしまう危険性がある。また一方で、未知のものすべてが理解可能になるわけではなく、切り捨てられる部分もある (野村 2014)。「メアリーは太陽だ」と言うことで、メアリーの「明るさ」「温かさ」については理解できても、足のサイズまではわからない。

⁵ このような類似性の多くは、実際にはメタファー的な捉え方を通じて初めて見出されるものである。

だからといって、メアリーを太陽に喩えるメタファーに問題があるわけではないし、ましてやメアリーが足のサイズを持たないということにもならない。足のサイズを伝えなければ、適切な別のメタファーを用いるか、あるいは直接に 24cm などと表現すれば良いだろう。ただし、そこで行われるのは、あくまでも表現の調整であって、表現対象であるメアリーの調整ではない。同様のことが、ラベルと図の問題にも指摘できる。これらの問題は、メタファーが持つ上記の通りの性質——「一部を切り出す性質」および「一部を切り捨てる性質」——を忘れてしまったために起こるものと言えよう。

6. 諸問題に対する可能な対処法

本発表で扱った問題への対処法として、まず次のことが指摘できる。すなわち、(i) ストループ効果や画像優位性効果などの認知バイアスに留意するということである。特にラベルの場合には、(ii) 写真を掲載することによって、ストループ効果を回避することができる。ただし、写真であっても、一連の身体動作の一瞬一瞬を切り出すことになるため、結局は対象をブロックに見立てる第二レベルのメタファーをとることになる。したがって、写真を使用したとしてもなお、メタファーの働きには十分に注意しなければならない。認知的なバイアスは、無意識に働くものであり、どれほど注意したとしてもそれを完全に避けることは不可能である。このような問題への対処として、Langacker (2016) は次の (iii)・(iv) を挙げている。(iii) 害の少ないメタファー、すなわち対象が持つ属性を十分に表し、かつ対象が持たない属性を(可能な限り)表さないメタファーを使用する。(iv) その際、複数のメタファーを同時に用いる。これにより、分析対象を多角的に把握し、対象そのものが有する属性とメタファーによって持ち込まれた属性を区別できるようになる。

参考文献

- Eddington, David (2007) Flaps and other variants of /t/ in American English: allophonic distribution without constraints, rules, or abstractions. *Cognitive Linguistics* 18: 23–46. / 池谷裕二 (2013) 『自分では気づかないココロの盲点』朝日出版社. / Johnston, Trevor (2008) Corpus linguistics and signed languages: no lemmata, no corpus. In O. Crasborn, E. Efthimiou, T. Hanke, E. D. Thoutenhoofd & I. Zwitserlood (eds.), *LREC* 6. 82–87. / 木村晴美・市田泰弘 (2014) 『はじめての手話：初歩からやさしく学べる手話の本』生活書院. / Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*, Oxford: Oxford University Press. / Langacker, Ronald W. (2016) Metaphor in linguistic thought and theory. *Cognitive Semantics* 2: 3–29. / Leipzig Glossing Rules = Bickel, Balthasar & Comrie, Bernard & Haspelmath, Martin (2015) Leipzig Glossing Rules: Conventions for interlinear morpheme-by-morpheme glosses. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. / 松田俊介 (2022) 「日本手話研究はラベルを使用するべきではない」『東京大学言語学論集』44: 193–210. / 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版. / 靱山洋介 (2021) 『[例解]日本語の多義語研究』大修館書店. / Stroop, J. R. (1935) Studies of interference in serial verbal reaction. *Journal of Experimental Psychology* 18: 643–662. / 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房. / 野矢茂樹 (2010) 『哲学・航海日誌 II』中央公論新社. / 田中太一 (2021) 「メトニミーと類似性：ネットワークモデル再考」『東京大学言語学論集』43: 293–307.